



記念館だより

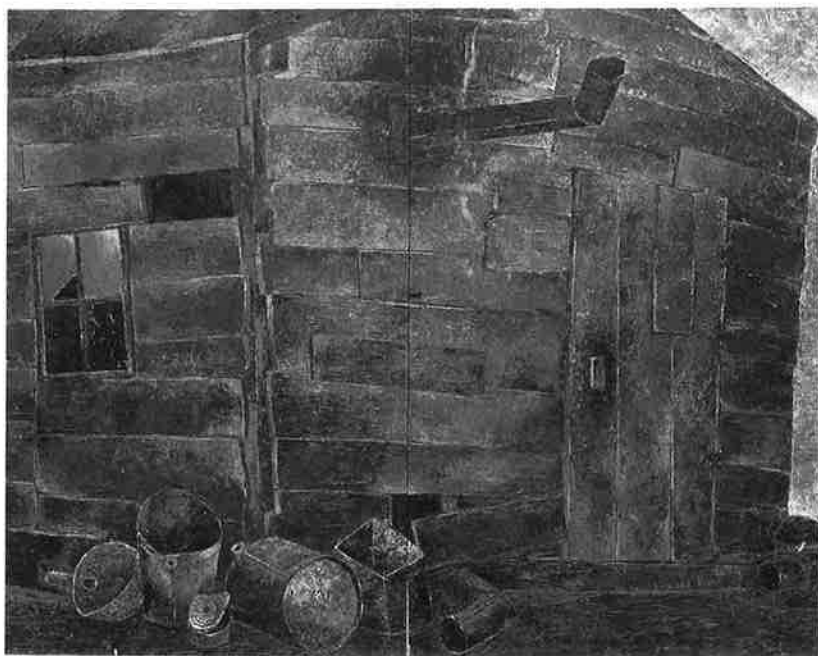
No. 4

神田日勝記念館

〒080-02
北海道河東郡鹿追町東町3丁目2
TEL(01566)6-1555

— 作品紹介 —

家 1960(昭和35)年
油彩・板 121.0×152.4cm 第15回全道展



「家」は神田日勝の短い画業において、初期を代表する作品である。第十五回全道美術協会展(全道展)に初出品、初入選を果たした作品であり、油彩画百号の制作を試みた最初の作品でもある。当時二十三歳であった日勝にとって全道規模の公募展に入選した

ことが、その後の制作に大きな励みになったことは想像に難くない。十九歳・二十歳の時「瘦馬」「馬」で地元帯広の公募展・平原社展に連続入選を果たした後、三年の空白期間をおいての入選であった。鹿追町で営農を継いだのが十六

歳の時。その後、畑にまだ点在していた柏の根を引き抜き、二十二歳で乳牛を導入するなど、計画的に農業経営を進めていった、そのさなかのこともあった。

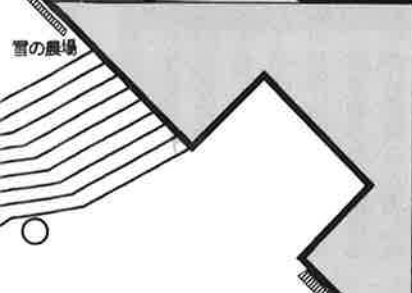
近隣に絵を語れる友人の少ない日勝は、一人で黙々と描き進める。そんな中で公募展は発表の場であり、自分の力を試す唯一の場でもあったのだろう。制作活動を続ける中で、埋めることのできない想いをぶつけるかのように、公募展での評価を求めていく。

拓北農兵隊として来道した神田一家を迎えたのは、荒地と終戦であった。鹿追についた翌日終戦という数奇な運命に戦後の混乱も手伝い、農業経験のない東京人は開拓の過酷さに次々と姿を消す。定住できたのは神田一家だけであった。

あるいは「家」は残された廃屋であるのか。

画面のほとんどもを覆いつくすようにとらえられた家。外壁には穴が開き、壁板がはがれ、窓ガラスが割れ、そこはもう家族のくつろぐ空間とは無縁な、暗い影・息苦しい重圧感が支配している。

え 1996年4月23日(火)～9月8日(日)



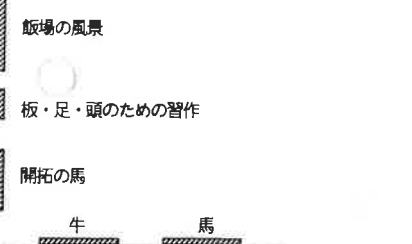
記念館完成から三度目の春を迎えました。雪が解け、活動が始まるこの季節に合わせて作品を入れ替え、神田日勝の新たな側面を展示しています。今回は目まぐるしく変遷した画風を、モノクロームの画面を作り出した時期と色彩に傾倒していった時期に分け、解説パネルで流れと相互のつながりを追っています。また、全体の流れとは別に特集として『家』に関連した作品を集め、新収蔵品を含めた過去最多、総計四十点の作品を展示しています。

展示室に入っすぐ、記念館初展示の『家』(高野斉氏蔵)があります。いくぶん小さな絵ですが「画集 神田日勝」ミュージアム新書 神田日勝」などの主要文献、また「神田日勝の世界」木田金次郎と神田日勝」といった展覧会にお



いて、初期の風景画として紹介されています。

『板・足・頭のための習作』は半年ぶりに展示。初期に描いた『飯場の風景』に共通する無表情な顔が、並んで展示されています。昨年、十八年ぶりに日の目を見た『牛』は引き続き展示しています。これまで作り続けてきたモノクロ

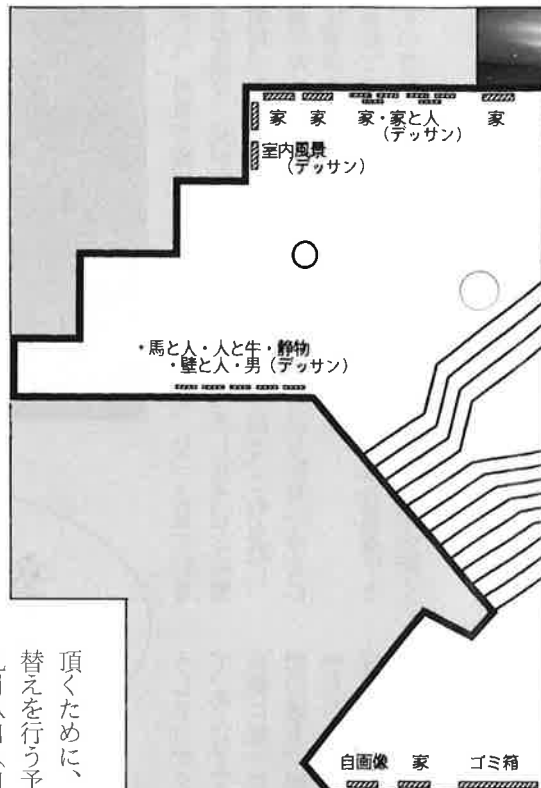


『馬(絶筆)』の周辺は大きく入れ替え、向かって右側は風景画を展示しました。初展示の『風景』を含む四点の小品は、晩年に描かれたもので、ほとんどが絵の具代のために描かれた「売り絵」となるものです。

「売り絵といえども、ぼくの作品だからね」と語っていた日勝はこれらを割

ームの世界を割って出てきたような腹の赤は、誰の目にも新鮮に映るようです。同題材で二作描かれた後の作品はさらに描き込まれ、独立選抜展に出品されました。本作品はその試作として、また、色彩の試行としてとらえられるでしょう。

平成8年度前期 展示模様替



頂くために、本年度は二回の展示替えを行う予定です。前期展示は九月八日(日)まで。後期は九月

十日(火)から、収蔵作品を中心とした展示により、神田日勝の世界の新たな側面を紹介します。

新寄贈寄託作品紹介

今年に入って二点、所蔵家の方から、寄贈または寄託という形で作品が寄せられました。

一点は川のそばに馬が三頭立つ夕暮れ時の風景画です。札幌市在住の木本 晃氏から寄せられました。



た。三年前になくなった父・薫氏が所蔵していたもので、「一般公開できる公的機関に管理してほしい」とい

う遺志により、今回の寄贈となりました。この展示替えて初公開です。



もう一点は一九六九年に帯広信用金庫から依頼を受け、カレンダの原画として描かれたものと同題材の『広尾海岸』です。こちらと同じく札幌市在住の高橋直美氏から、一年間預けて頂きました。他の作品では見られない海の風景に「意外な一面を見た」という声も多く聞かれます。

り切って描くことはできなかったのでしょうか。知人から語られる「陽気で明るい」日勝像とはまた別の、画家としてのかたくなな制作姿勢を感じることが出来ます。

向かい側には『静物』から始まる色彩へ傾倒していった時期の作品を集めています。克明描写を残しつつ色彩を取り入れた画面から、段階を経ながらも、しかし驚くほど短期間にその作風を変え、左官ゴテを用いて絵の具を厚塗りする作品を生み出していく、その過程を見ることが出来ます。全道展・独立展で入選を重ねるごとに画家としての名が知られ、売れ絵の制作依頼が相継いだこと、また

長女の誕生など、生活の充実期にあつて、画面はこれまでの作品に見られていた克明描写とは明らかに一線を画した、構図と色彩の研究へと向かっていきます。

二階には大作として初めて描いた『家』を特集しました。記念館に残されているデッサン三点、さらに年代が進み、人物を加えてより構造的にとらえた三点のデッサンと二点の小品から、小さな流れですがその移り行く足取りを見ることが出来ます。展示と併せて簡潔にまとめたチラシを配布し、鑑賞の一助としています。

これまで不定期に行ってきた展示替えですが、より鑑賞しやすく、より深く神田日勝の世界を知って

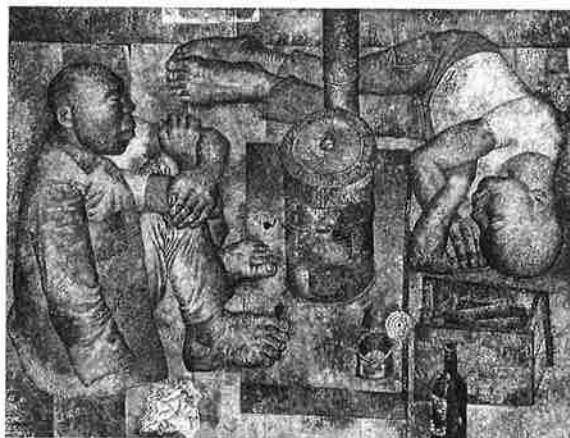
ぼくは絵のことはよくわからない。しかし不遜かもしれないが神田日勝のことはわかる気がするのである。一度も会ったことはないし、彼の生きた軌跡をくわしく知っているわけではないが、俺が神田日勝をわからないでどうする、という気持ちがある。

理由はただ一つ、ぼくと日勝が同じ百姓で、同じ年齢で、ぼくのほうが半年ほど兄貴だというにすぎない。

ぼくは炭焼きの子として生まれ、貧乏百姓の子として育った。十四歳まで農作業をし、馬車で澱粉工場へジャガイモを運び、兄が寝泊まりしていた造材山の飯場へ何度も行つて、家族のために必死に稼いでいる兄の仕事ぶりを見てきたのだった。売られてゆくぼくの家の馬が涙を流すのを見、伝貧で

白眼を剥き出して死んだ馬が脱糞するのを見た。

ぼくが日勝のことがわかるといふ気持ちを持ったのは、彼の絵の『飯場の風景』と『死馬』を見た時からだ。『室内風景』にも恐ろしさはあるし、絶筆となった後ろ脚



飯場の風景 1963 (昭和38)年

新しい時空

小 檜 山 博

は考えないようにしている。考えると自分の内側の底深い闇の中に沈んでいるものが、どろりと動くのを知っているからだ。この絵が理論と技法としてどうなのかなど、ぼくにはどうでもいいことだ。ともあれ『飯場の風景』は、ど



死馬 1965 (昭和40)年

いるものがわかる。考えていることが、はっきりと読みとれるのだ。またストオプの左側に横になつてうたた寝している男の頭の中に浮かび出ている情景も、ぼくには鮮明に見えるし、彼の軽い寝息も聞こえ、呼吸を一分間に何回しているかもわかる。錯覚ではない。はっきりしていることは、この二人の男はぼく自身であり、ぼくの父や兄であり、神田日勝自身であり、そして人間すべてなのだ。

てなのだということ

だ。つまり日勝は、これらの素材を使って、今まで誰もとらえられなかった人間の新しい内面を見つけたし、そのことで、すべての人間に普遍的な、新しい時空の世界をつくりだしたのだった。

の『馬』は、じっと見ているうちに動きだしてしまうほど完璧に完成された作品で、これも恐い。この馬は前脚だけしかないゆえに生命をもっている。しかしぼくは、『飯場の風景』と『死馬』にひかれる。理由の深く

うしてコオクスストオプを中にして、あんなふうな構図にしたのか。左側に座った一人の男が立てた両脚の膝を、組んだ両手でかかえるかたちになっているが、なぜこんな哀しい格好と顔をさせたのか。ぼくにはこの男の頭の中に去来して

感想ノートより……②

古希にして、この日勝の追会をみて、唯一言
威勢胸うたれるものがありました。
戦後50年戦後開拓草創の境を失くすものとして
この生涯の画は心に奥にせまるものがありました。

1995.平成7年9月28日 鹿児島市の松島町境内にて 帯広 林蔵

9/30 昨日、札幌市の然別湖へ来て、今日帰るといふ時、神田日勝
の名を知った。その作品を目の当たりにしたのは初めてです。
私は農業関係について研究する学生ですが、日勝の素直な
現実と見つめてくる様子が胸に響きました。考えをめぐらす
手紙をたくさんあると感じています。

拓 (札幌在住)

もう3回目になります。

私にとっては、絵が「面白い」とかどうということば、わかりづらい、

ただ、その中から、生きたこと、考えこまらぬものがある。

人は、生きるために、多くの苦しみと涙を流すものだ。

生きていこうと信じて、生きていこうと、工夫する。

努力、そうして行く人は生きていける。生きていける。生きていける。

生きていける。生きていける。生きていける。

帯広市、小野寺。

10/6 一度来たかったこの場所に、再び来ることに決まりました。
絶筆の馬きすは「良か。たはど! 天は青争物の
あの色のカラフルさというが、あの目に飛び込んでくる
ような色たちが、まのすは「すまです。
日勝は早く死にすぎた。すまです。
生きていたら、絶筆に会いたかったな。永井

この記念館に来るのは二回目です。初めて見た時とまた違う印象を受けました
生活感あふれる絵から日勝の生活と性格がうかがえ、人柄が少しでも
理解できたような気がする。

未完のまのすは、完成していません。力があり、良か。たはど。

32歳という若さで亡くなったのはとても残念です。もっといばんな

絵を描いてほしかたです。

音更町、石橋 11/25

H7. 12. 3.

この回りの未完のまのすは、来る度に日勝の
感性に刺激されます。時代背景が今の状況から
は、本当に理解はできないけれど、いろいろな考えを、かき
与えてもらっています。道に近代美術の歴史も、あつと
思います。

いば、神田日勝の世界にめぐりあえたことに
感謝します。

林蔵

子ども 絵画教室—油絵講座

1月9・10・13日 鹿追町民ホール/工作室

今回、初めて小中学生を対象とした絵画教室—油絵講座を開催しました。受講した子ども達は、小学校二年生から中学校一年生までの十名で、ほとんどの子どもが、油絵の具で絵を描くのは初めてということでした。



イーゼルを立てキャンバスに向かう子ども達。初めは緊張している様子でしたが、講師の斉藤隆博先生の楽しく、やさしい指導のもと、たちまち絵の具まみれになりながら制作に取り組んでいました。子ども達が、真剣なまなざしで多彩に絵を描く姿に、先生も驚いていました。今後も継続して子ども絵画教室を開催していく予定です。

達。初めは緊張している様子でしたが、講師の斉藤隆博先生の楽しく、やさしい指導のもと、たちまち

こども



色合いを用いることによって、絵への興味を喚起し、自由に発想できる導入としてのパンフレットを目指しています。表紙に『馬（絶筆）』を配置し、室内風景のデッサン二点を新しく掲載するなど、従来のパンフレットとは内容も一新していますので、大人の方にも見て頂けるものと思います。

子ども 芸術鑑賞バスツアー

1月12日（金）/北海道立帯広美術館

「帯広美術館に行ってみよう」と題して開催された子ども芸術鑑賞バスツアーでは十一人の子どもが参加。北海道立帯広美術館に行ってきた。ちょうど特別展示では収集の柱である版画の「今日のプリントアート」展を開催中。印刷技術の進歩によって従来の枠組みを越えた版画の世界に子どもたちも少し興奮気味で、展示室の中をあっ



ちに行ったりこっちに來たりと大騒ぎでした。初めは少し入りにくい感じのする美術館も、二度三度と訪れるうちに「見覚えのある作品」が増えて、自然と親しみが湧いてくるものです。今年もまた「美術館に遊びに行こう」と計画中です。

子どもパンフレット

記念館のパンフレットの「文字が小さく、子どもには読みにくかったり」「内容が難しく理解されにくかったり」といった点を改良し、子どもたちのためのパンフレットを制作しました。絵や文字を大きくし、明るめの

ちよつと I N F O R M A T I O N

- 伊藤恵美子展 (8月13～18日)
- 戦没画学生作品展 (8月25～9月2日)
- 馬の絵作品展 (10月8～13日)



展覧会—鹿追町民ホール

馬耕忌(八月二十五日)
神田日勝を偲ぶつどい。高橋揆一郎館長と窪島誠一郎信濃デッサン館長の館長対談。また田中光俊氏のギター演奏にのせて、都甲雅子氏が『私の神田日勝』の一節を朗読。

馬耕忌(八月二十五日)

開館記念日を祝うファンをつどい。展示室を会場に、ウオワ・デ・フルール・コンセール。併せて十四～二十日記念館をライトアップ

蕪壱祭(六月十七日)

神田日勝記念館及び関係諸団体による今後の事業は次のとおりです。